

トマス・アクィナスと自由学芸

片山 寛

I

トマス・アクィナスと自由学芸について、調べたこと、考えたことを述べたい。このことについて基本的に言えることは、そもそもトマスの時代には、自由学芸（三学四科）が中等教育の中心だということは、少なくとも概念としては一般化していたということである。アルクイヌス、ラバヌス・マウルスなどを経て、中世盛期には自由学芸による教育という考え方は、多くの人々に受け入れられていた。しかしそれは、現実に西欧各地でそのような教育が統一に行われていたということではない¹⁾。統一的な教科書や、各科目の教師の養成機関などが存在して機能していたわけではないのである。自由学芸というパッケージの中に、どのような教育内容が含まれていたかは、それぞれの学校（修道院付属学校、司教座聖堂付属学校、その他私塾など）によって様々であったと思われる²⁾。

トマスが少年時代（1230-39）にモンテ・カッシノ修道院で具体的にどのような科目を学んだのか、またナポリの Studium Generale でどのような中等教育（1239-1244）を受けたのかについて、受講者名簿や開講科目表のようなはっきりした記録は残っていない。しかし当時の一般的状況から考えて、それが自由学芸を（厳密にではなくとも）いちおう基礎にしつつ、それに自然学や哲学の学びが付け加わったものであるのは、確かだと思わる³⁾。

それゆえ、トマスと自由学芸の関係を考えるときに、私たちに二つの課題があるということになる。ひとつは比較的易しくて、それはトマスが自由学芸というものをどのように考え、自分の思想の中に位置づけていた

1) 岩村清太『ヨーロッパ中世の自由学芸』知泉書館 2007, 239 頁。

2) Ralph McInerny, 'Beyond the Liberal Arts', in: *The Seven Liberal Arts in the Middle Ages*, Indiana University Press, 1983, p. 249.

3) Cf. J. A. Weisheipl, *Friar Thomas d'Aquino*, Basil Blackwell, Oxford 1975, p. 11.

かということである。そしてもうひとつは、トマスの思想形成にとって、基礎的な自由学芸の学びが、現実にどのような意味を持っていたのかということである。後者は私たちが、中世の人々にとっての自由学芸の意味という問いを超えて、ルネサンスの人文主義を経て、遠く現代の教育におけるリベラル・アーツの意味を考えるという遠い目標にたどりつくためにも、大切な課題であると思われる。つまりそれは、現代の私たちにとって基礎的な教養とは何か、そして何であるべきか、という問題につながるであろう。しかしそれはまた、雲をつかむような大きな課題でもあって、実証的にテキストの分析によって^{あぶ}焙りだせるようなことではない。しかしいざれにしても、私はこの二つの課題について考えつつ述べることで、提題者の責任を果たしたいと思う。

II

トマスが自由学芸について言及している箇所は多くないのだが、もっとも頼りになるのは、『ボエティウス「三位一体論」註解』第5問題第1項第3異論解答である。そこでここでは先ず、それを紹介しようと思う。

ボエティウスは『三位一体論』の第2章で、アリストテレスの理論的哲学（思弁的学知）の三分（自然学、数学、神学）を紹介しているのであるが、この区分の是非がここでは問題になっている。第三異論は次のように問う。

哲学は一般に七つの自由学芸 *artes liberales* に区分される。その中には、自然学も神学も含まれておらず、理性的な学知と数学だけである。それゆえ、自然学と神学は、思弁的な学知の部分として措定される必要はない。

つまり、哲学の区分は自由学芸七科で十分であって、ボエティウスの自然学・数学・神学の区分の中で、数学以外の自然学と神学は余計であるというのである。

トマスはこれに対して本論で、ボエティウスの三分の方が正しいことを論じているのだが、それに続く第3異論解答で、以下のようにこの異論に答えている。

七つの自由学芸は、理論的哲学 *philosophia theorica* を十分な仕方

で区分するものではなく、むしろ、サン・ヴィクトルのフーゴーがその『ディダスカリコン』第3巻で述べているように、何らかの他のもの（学科）を省くことによって、七つの学科がひとつにまとめられているのである。なぜなら、哲学を学ぼうと望んだ人々は、これらの学科によって最初に教育されたからである。そしてこれらが三学 *trivium* と四科 *quadrivium* へと区分されるのは、いわばこれらの何らかの道によって、精神が生き生きと哲学の秘義へと入ってゆくからである。

そしてこのことは、哲学者（アリストテレス）の言葉とも符合している。彼は『形而上学』第2巻において、学知の方法は、学知より前に求められなければならないと述べている。そして注釈者（アヴェロエス）は、同箇所（の註解）において、すべての学知の方法を教えるところの論理学 *logica* を、人は誰でもすべての他の学知の前に学ばねばならないと言っている。この論理学に、三学は関わっているのである。

『ニコマコス倫理学』第6巻においても、（アリストテレスは）数学は子どもたちによって知られうるが、自然学は無理だと述べている。後者（自然学）は経験を必要とするのである。それゆえ次の認識が与えられる。すなわち、論理学の後には、数学が学ばれるべきである。数学に関わるのが四科である。こうして、いわばこれらある種の道 *viae* によって、精神は、他の哲学的諸学科へと準備されるのである。

あるいは、これらが他の諸学知の間で技術 *artes* と呼ばれるのは、これらが認識を有しているだけでなく、直接的に理性そのものに属するような何らかの仕事をするからである。たとえば、三段論法 *syllogismus* の構築を、あるいは論述を形成すること、数えること、測ること、メロディーを形成すること、また星々の軌道を計算することである。

これに対して他の諸学知は、一方では、たとえば神学や自然学のように、こうした仕事を有しておらず、ただ認識を有するだけである。それゆえ技術という名称を、それら（神学や自然学）は持つことができない。なぜなら、技術と呼ばれるのは、『形而上学』第6巻で言われるように、生産的な理性 *ratio factiva* であるからである。

あるいは（他の諸学知は）、たとえば医術 *medicina*、錬金術 *alchimia*、その他同様の学知のように、物体（身体）的なはたらきを有し

ている。それゆえこれらは自由学芸 *artes liberales* と呼ばれることはできない。なぜなら、この種の行為（医術や錬金術）が人間に属するのは、人間がそれによって自由であるのではない側面から、つまり身体の側面からだからである。

他方、道徳的な学知は、働き・行為 *operatio* のゆえに存在するのではあるが、『ニコマコス倫理学』の巻において明らかなように、その働きは、学知の働きではなく、むしろ徳の働きである。それゆえに、(道徳的な学知は) 技術 *ars* とは言われえず、むしろそれらの働きにおいては、徳が技術の役割を果たしているのである。それゆえ、アウグスティヌスが『神の国』第4巻で述べているように、往古の人々は、徳とは、善くそして正しく生きる技術だと定義していたのである。

ここでトマスが述べていることは、次のように整理できる。

- ① 七つの自由学芸は、理論的哲学 (= 学知 *scientia*) 全体を適切に区分するものではなく、哲学よりも以前の基礎を占めるにすぎない。理論的学知全体の区分としては、トマスは、自然学、数学、神学 (= 形而上学) というボエティウスの三区分を採用している。なお、学知全体の区分としては、彼はアリストテレスに従って、理論的学知、実践的学知、制作的技術の三区分をとる。要するに、学知全体からすれば自由学芸の占める範囲は、ごくわずかである。
- ② しかし同時に、自由学芸は、哲学の基礎となるべき学びとして定着している。これら七つの学科は、哲学そのものではなく、哲学への準備課程として方法、たとえば、「三段論法の構築、語り *oratio* の形成、数えること、測ること、メロディーを形成すること、また星々の軌道を計算すること」を提供するものである。
- ③ 三学（文法、修辞、弁論）は、論理学 *logica* に関わっている。論理学は、第2異論解答で述べられているが⁴⁾、それ自体は学知ではなく、学

4) 参照。第2異論解答「[形而上学] 冒頭において明らかなように、思弁的諸学知は、その認識がそのもの自体のゆえに獲得されるところのことがらについて行われる。しかるに、論理学の対象であることがらは、それ自体のゆえに認識が獲得されるのではなく、他の諸学知の何らかの助けになるために獲得されるのである。それゆえ、論理学は思弁的な学知の中に主要な部分として含まれるのではなく、いわば何らかの思弁的学知への還元 *reductum* として、含まれるのである。それは、論理学が思弁の働きにその道具として仕えるためである。すなわち、三段論法や定義等々としてであって、それらを私たちは思弁的諸学知において必要としているのである。それゆえ、ボエティウスの「ポルフェリウス註

知の道具である。

- ④ 四科（算術、幾何、天文、音楽）は、数学に関わっている。これらもまた、哲学への準備としての方法を提供するものである。
- ⑤ 三学四科は、それ自体は学知ではなく、学知のための手段であり、技術 *ars* の一種だと見なされる。「自由学芸」 *artes liberales* という名称も、そこから説明される。もちろんこれらの学科は、高度になればそれ自体が学知ともなりうるであろう。しかし「自由学芸」として、理論的・思弁的学知の基礎である限りにおいては、これらは学知（真理探究）そのものではなくて、学知のための手段であり、技術である。
- ⑥ 医術や錬金術など、本質的には技術の範疇に入る学知が他にもあるが、これらは「自由」学芸とは呼べない。これらは身体・物体に従属するからである。道徳的な学知（倫理学）もまた、自由学芸のように認識の手段・方法・技術としての側面を持たない。ここで技術の役割を果たすのは、学知ではなく徳だ、というのである。倫理学は実践的学知に属するので、思弁的学知の分類を主題としたこの問題の範囲を出ているが、「技術」が問題になっているので、言及されたのであろう。

以上のように、トマスにおいては、自由学芸は思弁的学知に手段を提供する予備学であるとして、限定的に位置づけられている。自由学芸は、それ自体が完成した体系でもないし、思弁的学知の一部でもない。それは技術の一種なのである。しかしそれは、より高い目的のために、それへ奉仕し、それへと開かれた技術であることができる。

Ⅲ

このような自由学芸の限定的な位置づけ、言い換えれば、自由学芸は予備的な教育として必要ではあるが、それ自体が高度な学知ではない、という見解は、トマスの他の著作でも一貫している。自由学芸は、より高い完成を目指すための基礎を作る教育だったのである。

『エチカ註解』第6巻第7講 1209-1211

続いてアリストテレスは、*quia et hic...* と述べることで、問いを提示している。すなわち、なにゆえ子どもは数学者にはなれても、知者

解』によれば、論理学は学知であるというよりはむしろ学知の道具なのである。」

sapiens すなわち形而上学者 metaphysicus もしくは自然学者 physicus つまり naturalis になれないのか、という問いである。この問いについてアリストテレスは、自然学者に関わる限りで答えている。すなわち、これら数学的なことから、経験がそれに属するところの可感的諸事物からの抽象によって、認識されるからである。それゆえ、これらを認識するためには、長い時間（の経験）は必要とされない。ところが、自然的なものの諸原理は、可感的なものから抽象されていないので、経験をとおして考察されるのであり、この経験のためには長い時間が必要とされるのである。

他方、知恵に関しては、アリストテレスは次のことを付け加えている。すなわち、若い人々 juvenes は、知恵的なことから sapientialia すなわち形而上学的なことから metaphysicalia を信じない。つまりそれらを口で述べることはするのだが、精神によって自分のものにする attingunt ことがないのである。しかし数学的なことからについては、それが何であるかは、彼らにとって不明ではないのである。なぜなら、数学的なことからの概念 ratio は表象可能なことから属しているのに対して、知恵的なことからは純粹に知性的なことからであるからである。若い人々は、表象力 imaginatio のもとにやってくることからをたやすくとらえることができるのだが、感覚や表象力を超えたことからに関しては、精神によって自分のものにする事ができない。なぜなら、彼らは、一つには時間（経験）の短さのゆえに、もう一つには自然の多様性のゆえに、そのような考察に有効で修練された知性をまだ有していないからである。

それゆえ、教育 addiscendum の適切な順序は以下のものである。すなわち、①最初に子どもたちは**論理的なことから** logicalia によって教育される。なぜなら論理学は哲学全体の方法 modus を教えるからである。②しかるに第二には、経験を必要とせず、表象力を超えることのない**数学的なことから** mathematica によって教育される。③第三には、感覚や表象力を超えないとはいえ経験を必要としている**自然的なことから** naturalia によって教育される。④第四には、**道徳的なことから** moralia によって教育されるが、それらは、エチカ第1巻に書かれているとおり、経験および受動（感情）passio から自由な精神を必要としている。⑤しかるに第五には、**知恵的なことから** sapientialia および**神的なことから** divina によって教育されるが、それら

は表象力を超えており、強い知性を必要としているのである。

これら五つの教育課程の最初の二つ、論理学と数学は、自由学芸に対応している。ここでもやはり、基礎教育課程だとされているのである。

後の三つ、自然学、倫理学、神学の中で、倫理学は思弁的・理論的学知には含まれないので外すとして、その代りに「数学」が挿入されたのが、先に見た『「三位一体論」註解』の三区分であるわけである。

ここで、数学の位置づけについて考察が必要である。数学はポエティウスにおいては、三つの思弁的学知（自然学、数学、神学）の中間に位置づけられるのだが、ここでのアリストテレスに従えば、五つの教育課程（論理学、数学、自然学、倫理学、神学）の二番目にあり、ここでの論理学と数学は、明らかに三学・四科を意味している。この位置づけの違いは、何を意味しているのであろうか。

一つの説明は、四科であるところの数学と、思弁的学知の三区分の中にある数学とは、別のものだという解釈である。長倉久子氏は、『「三位一体論」註解』の研究⁵⁾の中でそのように説明しておられた。これはある意味では当然であって、トマスは三学・四科は基本的に技術 *artes* であって、哲学そのものではないとしているからである。そのために長倉氏は、哲学の一部門としての数学は、伝統的な、算術と幾何学からなるものであって、四科の方は、初歩的な「勘定、計量、旋律制作、星の運行計算」のレベルなのだとされた。そのような説明も可能かもしれないが、私は、この二つの「数学」は、現実的には同じ一つの数学であってもかまわないと思う。一つの数学が、技術 *ars* として上位の哲学に仕える手段であることも、それ自体が哲学の一部門としての学知、つまり独立した真理の探究であることも、どちらも可能であると思われるからである。

たとえば、『「三位一体論」註解』第5問題第1項第4異論解答でトマスは述べているのだが、医術 *medicina* は、理論的医術 *theorica medicina* と実践的医術 *practica medicina* に区分されるのであるが、それは二つの別の医術があるのではなく、そこで論じられていることがらが、「はたらき *operatio* に近接しているか離れているかに応じて、(区分が)適用されている」のである。

5) 長倉久子『神秘と学知』創文社 1996、111頁。

『三位一体論』註解』第5問題第1項第4異論解答

アヴィセンナ Avicenna が『医術』の冒頭で述べているように、理論的なことがらと実践的なことがらが区分されるあり方は、哲学が理論的の哲学と実践的の哲学へと区分されるとき、たとえば医術が区分される時のように、技術 artes が理論的の技術と実践的の技術へと区分される時とは異なっている。というのは、哲学も技術も理論的なことがらと実践的なことがらによって区分されるのではあるが、哲学は、それらの区分を目的 finis から得なければならないからである。それは、理論的と言われることがらは真理の認識（を目的として、それ）へと秩序づけられるのに対して、実践的と言われることがらははたらき operatio へと秩序づけられるためである。

とはいえこのことは、哲学全体と技術が、哲学の区分において、人間の生の全体がそれへと秩序づけられているところの至福 beatitudo という目的への関係が保持されているということにおいて、区分される場合である。というのは、アウグスティヌスが『神の国』第20巻でヴァロ Varro の言葉に従いつつ述べているように、至福になるため以外には、人間には哲学するという行為の原因は何もないからである。それゆえ、哲学者たちによって、二つの幸福 felicitas が措定されているのであるが、『ニコマコス倫理学』第10巻において明らかであるように、そのひとつは観想的幸福 contemplativa であり、もうひとつは活動的の幸福 activa である。これに対応して、哲学の二つの部分をもまた、哲学者たちは区別したのであって、彼らは道徳的な部分を実践的の哲学 practica と言い、自然学的、理性的な部分を、理論的の哲学 theoretica と呼んでいるのである。

他方、技術 artes のうちのあるものは思弁的 speculativae だと言われ、あるものは実践的 practicae だと言われる場合、それらの技術のある特殊な目的への関係が（内容的に）言い表されているのである。たとえば、もし私たちが、農業は実践的な技術であり、他方、弁証法 dialectica は理論的な技術だと言う場合がそれである。しかるに、医術が理論的の医術と実践的の医術へと区分される場合には、目的に応じた区分が適用されているのではない。というのは、医術の全体がはたらき operatio（を目的としてそれ）へと秩序づけられているがゆえに、それは実践的の技術の下に含まれているからである。だからここで言う区分は、医術において論じられることがらが、働きに近接しているか

離れているかに応じて、適用されているのである。つまり、実践的医術と言われるのは、治癒のための処置 operandum のあり方を教えるような医術の部分のことであって、たとえば、これこれの腫瘍にはこれこれの薬剤 remedia が施されるべきだ、というのがごとくである。他方、理論的医術と言われるのは、原理を教えるような医術の部分のことである。すなわち、それらの原理からして、人間は治癒行為 operatio において（健康を）整えられるのではあるが、しかし近接した仕方ではない。たとえば、健全さ virtutes は三つあるとか、熱の類は数多い、というのがごとくである。

それゆえ、もしある種の活動的な学知のある一部が理論的と言われるとしても、そのことのゆえに、その部分が思弁的哲学のもとに置かれる必要はないのである。

医術の場合には、全体としては自然学の一部ではなく、技術なのであって、その中に部分的に理論的要素の濃い部分（おそらくたとえば生理学 physiology のような）も含まれるとトマスは言うのだが、数学の場合には、基礎課程としての技術的な部分と、上位の理論的な探求としての学知的な部分があって、それらが連続的に存在したとしてもおかしくない。ここでは技術的な部分は、哲学とは別の何か実践的な目的のための技術ではなく、まさに（数学を含む）理論的哲学を目的とした、そのための技術であるからである。

しかしともかく、数学は、アリストテレス『ニコマコス倫理学』によれば自然学の下位に、ポエティウスによれば⁶⁾自然学の上位に位置づけられている。いったい、どちらの位置が本当なのであろうか。このことに関して、トマスは『「三位一体論」註解』第5問題第1項第10異論解答で次のように答えている。

自然学を数学よりも後に加えて学ぶべきだ、ということが起こるのは、自然学の普遍的な教えを学ぶには経験と時間が必要だからである。とはいえ、(自然学の対象である)自然的な事物は可感的であるのだから、可感的質料から抽象された数学的なことがらよりも、自然本性

6) ポエティウスはしかし、アリストテレス『形而上学』第6巻第1章あるいは『自然学』第2巻第2章を根拠にしている。

的にはより優れて知られるのである。

つまりトマスは、われわれが学ぶ順序としては、数学を先に学ぶことがありうるが、自然本性的な順序としては、数学の方が上位にあると述べているのである。ここからも、二つの数学があるわけではないことが知られる。

数学が学知として本質的に自然学よりも上位にあるのは、『三位一体論』註解』第5問題第1項主文によれば、自然学の対象が質料的・感覚的実在であるのに対して、数学の対象は「その存在については質料に依存しているものの、その理解については依存していない」もの、「たとえば線や数のように、定義の中に可感的質料を含まない」ものだからである。質料からの抽象度が高いものほど、より高度なものである——それは、すべての学知の究極に「神学」があるという、トマスの学問論の全体構造にかかわるものだと言えよう。

トマスの『「分析論後書」註解』の中に、次のような一節がある。

あるいは、すべての証明 demonstratio においては、人は、われわれにとってよりよく知られたことがらから出発しなければならないのであって、個物からではなく普遍的なものから出発しなければならないということである。というのは、ある種のことがらは、私たちにとってよりよく知られたことがらを通してでなければ、私たちに知られることはありえないからである。ところで時には、私たちにとってよりよく知られたことがらが、端的に simpliciter、自然本性に即して secundum naturam も、よりよく知られることがある。たとえば、数学的なことがらにおいて起ることだが、そこでは、質料からの抽象のゆえに、形相的諸原理によらずしては証明は成立しない。このようなことがらにおいては、論証は端的によりよく知られたことがらからなされるのである。同様に時には、私たちにとってよりよく知られたことがらが、端的にはよりよく知られないことがある。たとえば、自然的なことがらにおいて起ることだが、そこでは事物の本質やちからが、質料の中にあるために隠されており、外的にそれらについて現れることがらによって私たちには知られるのである。それゆえこうしたものにおいては、論証はほとんどの場合、私たちにとってよりよく知られ

た結果から生じるのであって、端的に知られたことがらからではない。

つまり数学的なことがらは、ある意味では平易であり、ある意味では難しい、とトマスは言うのである。数学は、経験に依存しないだけに、子どもにも可能なのだが、逆に、ことがらそのものが抽象的であるがゆえに、本質的には高度であり、大人にも難しいのである。だから数学は、初等・中等教育で基礎的技術として先ず学ばれ、自然学の学びがすすんでいった後に、理論的学知として学び直されるべきである。トマスはそのように考えていたと思われる。そしてそれらのすべての学びは、最終的には神学(形而上学)の学びを目的とし、それへと開かれているのである。

IV

トマスがこのように、学知全体の見取り図を書き直す必要があったのはなぜだろうか。彼がこのことに積極的であったのは、同時代のボナヴェントゥラと比較しても明らかだと思われるが、それはおそらく、トマスがアリストテレスを積極的に学んだことと関係していると思われる。

12、13世紀にアリストテレスの著作の多くが、アラビアの哲学者たちの註解書とともに大規模に西欧世界に流入してくる。その中で、従来、学知のシェーマとされてきた「自由学芸」を見直さなければならなくなったのは、必然だったと言える。なぜなら、それまでの多分に中味のない、あるいは盛り込まれた中味が学校によって異なっていた「自由学芸」とは違って、アリストテレスは中味の詰まった、一貫した高度な内容を持つ体系だったからだ。これだけ大規模なものを受け入れる体系としては、自由学芸は明らかに役不足であった。

トマスにとって、しかし、自由学芸を捨て去ることは問題にならなかった。また自由学芸からアリストテレスに乗り換えることも、考えられなかった。むしろ彼がしたのは、より大きな、根本的にはキリスト教的な体系の中に、アリストテレスの哲学と自由学芸の両方を位置づけることだったのである。

自由学芸はこうして、世俗的な哲学のさらに準備課程として、低く位置づけられることになる。稲垣良典先生によると、それによって自由学芸は、キリスト教神学との直接的な関係を失ったために、続く時代の中でそれが世俗化するという結果を招いたという⁷⁾。

Ralph McInernyによると、トマスが、あるいはスコラ主義が、初めて

自由学芸に低い位置づけを与えたわけではなく、元来自由学芸は、何か他のもののための道具であり、基礎教育としての性格を持っていたという。ただ、12世紀以前には、自由学芸は、一般に、聖書の学びのための基礎教育であったのが、トマスによって、哲学的学知のさらに基礎教育に位置づけられることになったのである⁸⁾。

もしそうだとすると、自由学芸が真に自立的で力強い、充実した中味を持つにいたったのは、むしろルネサンス期以降のことではないかという推測が成り立つことになるが、それについてはもはや、私の報告の範囲を越えることになる。

V

トマス・アクィナスにとって、それでは自由学芸の学習は、実質的にどのような意味を持っていたのだろうか。トマスにとって、神学よりも下位に位置づけられる諸学は、基本的に神学と対立するものではなく、むしろ本質的に、神学に従属するものであった。『三位一体論』註解』第5問題第1項主文に言われるように、他の諸学は神学から自身の原理を得ているからである。

他方、質料なしに存在しうるがゆえに、その存在に即して質料に依存していない思弁の対象がある。それは、神や天使のように、決して質料においては存在しないものであるか、あるいは実体 *substantia*、質 *qualitas*、存在者 *ens*、可能態 *potentia*、現実態 *actus*、一と多 *unum et multa* などのように、ある意味では質料において存在するが、他の意味では存在しないものがある。これらすべてを扱う学知こそ、テオロギア、すなわち神学 *scientia divina* である。こう呼ばれるのは、神学における根源的对象にあたるのは神だからである。神学は別名、形而上学 *metaphysica* とも呼ばれる。それは自然学を超える *trans physicam* との意味であるが、その理由は、私たちにとって自然学の後に *post physicam* 学ばれるべきだからである。私たちは、可感的事物から非可感的事物へとすすまねばならないからである。神学はまた、

7) 稲垣良典「神と音楽」、『ラチオ スペシャル・イシュー 思想としての音楽』講談社2010所収、148頁。

8) McInerney, op. cit., p. 257.

第一哲学 *philosophia prima* とも呼ばれる。それは、他のすべての諸学は、その原理を、この学知から受けており、この学知の後に従っているという意味においてである。

神学と哲学の「二重真理」のようなものは、ここには見出されない。また、神学がより上位の学知だからといって、それが他のすべての学を支配しているというわけでもない。むしろ神学は、実際にそれを遂行するためには、下位の諸学で学んだ知識を総動員しなければならないし、それでもなお足りないのだと告白しなければならない宿命を負っている。なぜなら、「神学における根源的対象にあたるのは神」だからである。私たちは、トマスが自由学芸を、上に向かって開かれた技術だと考えていたことを確認したが、トマスにとって究極の学知であるところの「神学」は、さらに本質的な意味で、無限の存在に向かって開かれた学知なのである。

これで問題に解決が見つわけでは全くないが、最後に、神学と他の諸学の関係について述べた、『三位一体論』註解』第5問題第1項第9異論解答を引用して、この報告を締め括りたいと思う。

神学 *scientia divina* は、自然本性的には *naturaliter* すべての学知の第一の学知であるとはいえ、私たちにとっては *quoad nos* 他の諸学知の方がより先である。というのは、アヴィセンナが彼の『形而上学』の冒頭で述べているように、この学知の順序というのは、自然学的な諸学知において多くのことがら（概念）が定められた後で、学ばれるべきだということである。それら多くのことがら、たとえば生成 *generatio*、消滅 *corruptio*、運動 *motus*、その他同様のことがらを、この学知（神学＝形而上学）は用いるのである。

同様に、神学は数学の後でもある。というのは、この学知は分離的諸実体（天使）の認識のために、天上的な領域の数と秩序を認識する必要があるのであり、このことは、それへと数学の全体が（前提として）必要とされているところの、天文学 *astrologia* なしには不可能だからである。

他方、他の諸学知、たとえば音楽 *musica*、道徳 *morales* やその他同様の学知は、それ自体の良き存在のために存在しているのである。

とはいえ、神学が、他の諸学知において証明されたことがらを前提しており、また他の諸学知の原理を証明するからといって、それは悪

しき循環であるという必要はない。なぜなら、原理というものを、他の学知、すなわち自然学は、第一哲学（形而上学＝神学）から受容するのであるが、それらの原理は、最初の哲学者もまた同様にそれを自然学から受け取ったということを証明するわけではない。むしろそれらの原理は、自体的に知られる他の諸原理によって証明されたのである。同様に最初の哲学者は、彼が自然学者にもたらした諸原理を、自然学者から受け取った諸原理によって証明したのではなく、自体的に知られる他の諸原理によって証明したのである。それゆえ、これらの区別において、ある種の循環があるわけではない。

さらに、自然学的な証明の源泉であるところの可感的な結果（自然現象）は、私たちにとっては最初により明らかであるが、しかし、それらによって私たちが第一の諸原因の認識へと進んでゆくときには、これら諸原因からして、それらの結果の根拠 *propter quid* が私たちに明らかになるのである。それらの結果から、これら諸原因は、理由 *quia* の証明によって証明されたのではあるが。

こうして、自然学もまた、神学 *scientia divina* に何らかのものをもたらすのであるが、とはいえ、神学によって、自然学自身の諸原理が知らされるのである。それゆえポエティウスは、（三つの学知の）最後に神学を置いているのであって、その理由は、神学が私たちにとっては最後の学知であるからである。
